

学び合いを支える言語活動の充実 ～「思考力」「判断力」「表現力」を育む三つの対話～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

学校提案「学びをデザインする子どもたち ～つなぐ・つむぐ・つくる～」を受けて国語科部では、本年度の研究テーマを「学び合いを支える言語活動の充実 ～『思考力』『判断力』『表現力』を育む三つの対話～」とした。三つの対話、つまり、対象、他者、自己との豊かな対話により、子どもたちの「思考力」「判断力」「表現力」を育てていきたいと考える。そのためには、子どもたちの学びをつなぎながら、クラスみんなが安心して学べるクラス、夢中になって学べる授業づくりが大切である。教材と子ども、子ども同士、知識と知識をつなぎ、つむいでいくことのできる充実した言語活動を取り入れた授業づくりを研究していきたい。

(2) 国語科でめざす子ども像

「思考力」「判断力」「表現力」は、変化の激しい社会で自立的に生きる上で重要な能力である。この三つの力をつけていくことが学習指導要領にいわれる「実生活に生きて働く国語の力」につながってくる。国語科部では、この三つの力を以下のように考える。

「思考力」とは、「書き手や話し手の言葉や文章とそれに込められた意味や意図を正確に理解し、想像する力。また、自分の考えや思いを発信するために事柄や内容を整理しまとめる力」と考える。

「判断力」とは、「自他の考えを比較し、共通点や相違点を整理し、正しく評価できる力。また、文章や語句についてその正否や価値を判断することができる力」と考える。

「表現力」とは、「豊かな語彙をもち、適切な表現を考えながら話したり、場面にあった適切な言葉を使いながら書いたりすることができる力」と考える。

主体的に取り組む学び合いの中で、これら三つの力を自ら育てていくことのできる子どもたちを国語科でめざす子ども像と考える。

2. 国語科学習における「学びをデザインする子ども」

国語科部では、学びをデザインする子どもの姿を次の表のように考えている。

	低学年	中学年	高学年
課題解決	教師と共に単元全体の見通しをもって学びを進めていく。	自分たちの目指す姿を教師と共に探り、単元全体を見通して学びを進めていく。	今までの学習経験をいかしながら、単元全体を見通して学びを進めていく。
対話	自分の考えを順序立てて伝え、友だちの考えを分かろうとたずねる。	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞き、そこから気づいたことを伝え合ったり、自分の考えを深めたりする。	多様な考えに進んでかわり、三位一体の対話で自己の変容に気づく。
学び方	学び方をいかして学習を深めようとする。	これまでの学び方を目的に応じて活かし、学習を深めることができる。	これまでの学び方を目的に応じて選択し、活用し、学習を深めることができる。

今年度国語科部では、子どもたちが学びをデザインしていくことができるような支援のあり方を「言語活動の充実」をテーマに探していきたい。

（１）つきたい力の明確化

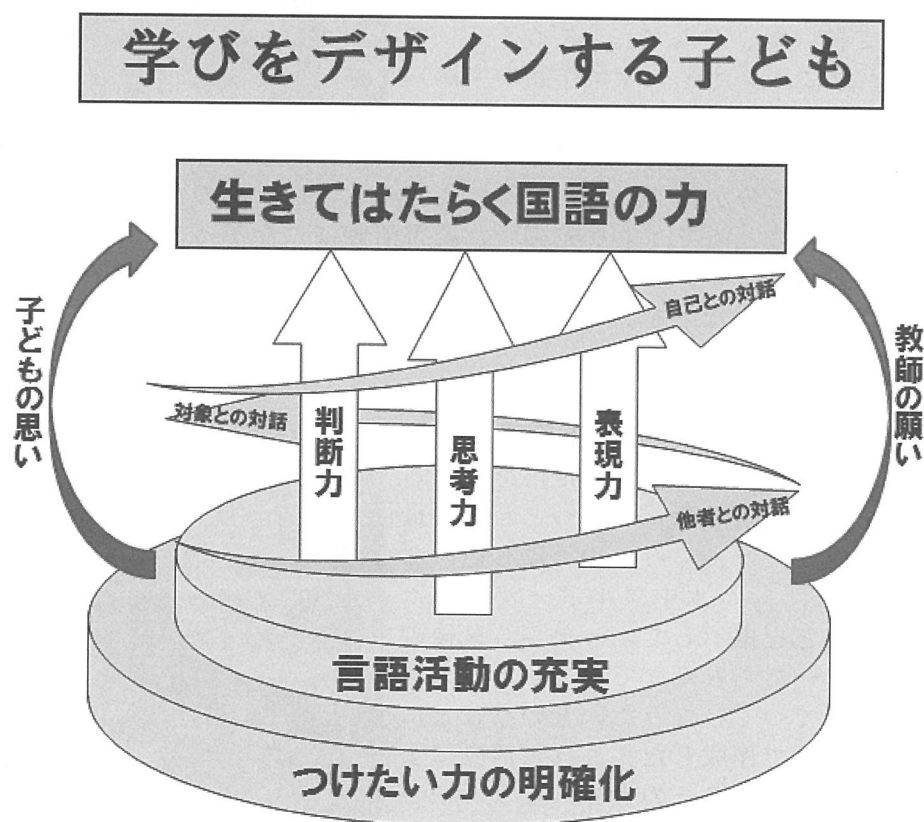
国語の能力は螺旋的・反復的に繰り返しの学習の中でこそ身につくものである。それ故、ある単元において、どのような言語活動を位置づけるかの前に、教師から見て、子どもたちの実態を把握し、教材の特徴（魅力）を理解する必要がある。その上で、指導のねらいを十分に確認し、単元を通して子どもたちにつきたい力を明確化する必要がある。

（２）単元を貫く言語活動

言語活動を充実したものにしていくためには、単元を貫いて言語活動を位置づける必要がある。言語活動を単元の一部にしか位置づけず、前後で関連のない別の言語活動を行うのでは効果は上がらない。充実した言語活動とは、子どもたちにとって学習の見通しをもてる活動であり、子どもたちにとって具体的な目的や必要に応じての活動でなければならない。さらに、指導上の重点的なねらいを実現していくために学習活動を精選していくことも重要である。

（３）教材との出会いの工夫

子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫していく。例えば、同一シリーズや同一作者の作品を読みやすい環境を教室に整えることで、子どもと教材との距離が縮まり、そこで教材と出合わせることで、子どもたちの学習への関心意欲は高くなるであろう。子どもたちが、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入の工夫が必要である。



以下に二年生「スイミー」の実践例を用いて、「学びをデザインする子どもたち」に迫ってみたい。

単元を通して、子どもたちに「つきたい力」を育むために、本実践では、「多読」と「本の宝箱（たからばこ）」という二つの言語活動を取り入れた。

①「レオ・レオニ読書コーナー」の開設

単元に入る前に、子どもたちと教材とのやさしい出会いのために、教室に和歌山市民図書館からお借りしたおよそ 100 冊のレオ・レオニ作品を並べた「レオ・レオニ読書コーナー」を設けた。また、読み聞かせボランティアのお母さん方に協力していただき、レオ・レオニ作品の読み聞かせをしていただいた。このような出会いを通して、子どもたちは、朝の読書タイムなどを利用し、「スイミー」の学習と並行して、たくさんのレオ・レオニ作品に親しむことができた。



②「本のたからばこ」を通しての交流

本単元では、子どもたちは、「本のたからばこ」を通して学習を進めていった。具体的には、授業ごとにスイミーへのメッセージカードを書き、それを「本のたからばこ」にためていった。学習のまとめとして、「スイミー」での一番のお気に入りの場面を絵とともに紹介文を「本のたからばこカード」として書いた。そして、「スイミー」での学習経験をもとに、レオ・レオニ作品の中からお気に入りの作品を一つ選び、「本のたからばこ」をつくりあげた。最後に、完成した「本のたからばこ」を小グループに分かれて紹介し合った。このような「本のたからばこ」を通じた交流が、子どもたちにとって、より充実した読書活動につながっていった。今後は、一年間を通して、国語科で学習する物語教材や自分で読んだ本の中で、感動したことやぜひ友だちに紹介したい本などを「本のたからばこカード」に書き、「本のたからばこ」にためていきたいと考えている。



③学びの筋道を振り返ることのできる環境作り

本単元では、「2Cの海の中の世界」をつくることも「単元を貫く言語活動」の一つとした。最初は、担任が作成した「まぐろ」や「にじ色のゼリーのようなくらげ」、「水中ブルドーザーみたくないせえび」などを掲示していったが、最後の場面では、スイミーたちみんなで協力した「大きな魚」を自分たちでつくってみたいということになり、クラスみんなで作成した。これら活動によって、教室全体が、スイミーの世界になり、子どもたちもよりスイミーの世界に浸ることができた。



3. 研究の展望

研究に対する取り組みを「対象」「他者」「自己」の三つの対話ごとについて述べていきたい。

(1) 対象との対話

国語科の学習では、教材文の叙述を手がかりにして、自分なりの解釈や考えをつくっていく。その際には、言葉と言語を関連づけたり、文と文を関連づけたりしながら対象との対話を行っていくことになる。そこで、(i) どの言葉や描写に着目するか。(ii) どの言葉や描写とつながっているかを考える。(iii) どのような解釈ができるのか。これらを子どもたちが意識できるようにしていく。そのために、学年に応じた単元構成や授業展開を研究の対象としていく。

(2) 他者との対話

「文章と友だちの意見とをつなげて自分の意見を更新する」「友だちと別の友だちの意見を聞き比べることにより自分の意見を更新する」といったことができるようにするために、どのような授業展開が有効であるかを研究対象としていく。よって他者との対話を成り立たせるために、聞き手と話し手の間に情報のやりとりをする必然性や目的が必要となる。それらが生み出される課題設定の仕方についても研究の対象としていく。

(3) 自己との対話

自己との対話は、自己の世界と対象・他者との世界を繋げる活動である。主体的な自己が、対象・他者と関わっていく中で、自己を明確化していく過程が学習である。一人一人の生活と結びついた言葉の意味をつかさどるものであり、自分に語りかける言葉である。よって、言葉や文を吟味することを通して、自己内対話がうまれる授業展開を研究していく。

4. 研究の評価

学校提案の「学びをデザインする子どもたち～つなぐ・つむぐ・つくる～」がどの程度達成できたかは、子どもたちの学びの軌跡を評価しなくてはならない。そのために、授業記録をとり、子どもたちの学びの実際をできる限り詳しく記述することにより評価したいと考える。そこで、評価と支援が一体となるように、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて、長期的な研究の成果と課題についても把握を行う。方法としては、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士の比較によって行うこととする。

(参考文献)

文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説国語編」 東洋館出版社
水戸部修治 (2011) 「小学校国語科言語活動パーフェクトガイド1・2年」 明治図書
笠井健一 水戸部修治 津田正之 白旗和也 弘前大学教育学部附属小学校 編著 (2012)
「授業における『思考力・判断力・表現力』」 東洋館出版社
秋田喜代美 藤江康彦 (2007) 「はじめての質的研究法 教育・学習編」 東京図書